



松山 京子
(写真『慈愛』刊行委員会提供)

昭和二十四（一九四九）年四月一日、金ヶ瀬村（現在の大河原町金ヶ瀬）に待望の医院が開業した日です。
まだ薄暗い早朝、門を開けようとした京子は思わず「あっ」と声をあげました。既に十数人の患者さんが門の前に並んでいたのです。

それまで金ヶ瀬村には医者がいませんでした。具合が悪くても我慢を重ね、手遅れで命を落とす人も多く、村の大きな問題になっていました。そのころ、隣村の小山田に腕のいい女医さんがいるという評判がたっていました。仙台空襲で家を焼かれ、疎開先の間借りの部屋で患者を診ているというその女医さんの名前は、松山京子といました。

金ヶ瀬村の村長や助役は、京子の所に何度も熱心に通い、村に来てくれるようお願いしました。そしてつい承諾を得たのです。京子が四十三歳の時でした。

開業したその日から目の回るような毎日が始まりました。一日に百数十人もの患者さんの診察と、昼となく夜となく頼まれる往診。食事をする暇も眠る時間も満足にとれないほどです。丈夫な京子でもよく体が続くものだと思うほど忙しい日々でした。

一年後、長男の進学のこともあり、松山家は仙台に家を持つことになりました。村人たちは京子がいなくなるのではないかと心配しました。しかし、京子は自分一人が金ヶ瀬に残る道を選んだのです。

土曜の夜には仙台に帰り、手作りの夕食を囲んで子どもたちの話を聞くのが京子の一番の楽しみでした。まだ小さかった娘には毎日ハガキを書きました。愛する家族のそばにいたい、どれほどそう思ったことでしょう。しかし、京子はその後もずっと金ヶ瀬にいて、地域医療に精力的に取り組んだのでした。

山越えの遠い家でも大雪の凍える夜でも、頼まれれば出かけ、往診料は取りません。そればかりか、生活の厳しい家からは、「あとでいいのよ。」と言って、治療費や薬代さえ取らないこともあったのです。

見立てがよくて腕もよく、気さくで明るくて誰にでも優しい京子。その豊富な経験と、日々学び続けている最新の医療知識によって、当時、助からないと思われた命をとりとめる人も多くいました。



40年以上校医を務め、子どもの名前、家族のことまでよく知っていた京子

昭和三〇（一九五五）年、八月のある暑い日のことです。生後四か月の長男の頭におできができたと一人の母親が来院しました。京子が治療し一旦はよくなったものの、五日ほどすると頭が大きく腫れ上がり、ひどく苦しみ出したのです。あいにく土曜日の夜で、京子は仙台に帰っており、やむなく別の病院に緊急入院しました。その病院でも、夜を徹した治療が行われました。しかし、翌朝、「残念ですがもう治る見込みがありません。最期は家で静かに……」そう言われて帰されてしまいました。赤ん坊は、百人にほんの二、三人助かるかどうかの難病にかかっていたのです。若い母親は、ただ泣き崩れるしかありませんでした。家族も皆、嘆き悲しみましたが、もうどうすることもできません。親戚が集まりお葬式の相談などしているところに、知らせを聞いた京子が駆けつけました。

疎開：戦争や火災などで受ける害を少なくするため、都会の物や人をほかの土地にうつすこと。

承諾：相手の願いやたのみを聞き入れて承諾すること。

精力的：疲れを見せずに物事を積極的に行っていく様子。

「危篤ですが、今私にできる限りの治療をしてみます。連れてきてください。」
京子には珍しく険しい表情でした。家族は、わらにもすがる思いで赤ん坊を戸板に載せて運びました。その時、赤ん坊の頭から大量の血うみが流れ出したのです。だれもがもうだめだと思いました。しかし、京子は手を止めませんでした。すぐさま点滴や新薬の投与など、懸命の治療を開始したのです。

一時も気を抜かず見守り続けて、三日目の朝のことです。眠り続けていた赤ん坊の口元がかすかに動くのを見た京子は、母親に向かって静かに言いました。
「お乳を飲ませてみて。」

母親がスプーンでそっと口に持っていくと、赤ん坊は小さな唇で弱々しいながらも吸い始めたのです。京子に、やっといつもの笑顔が戻りました。母親の肩をそっと抱くと、優しい声で言いました。

「もう大丈夫ですよ。…おかあさんも頑張ったわね。」

「先生…。」

母親の目から涙がとめどなくあふれ出し、あとは言葉になりませんでした。一度は諦めかけた赤ん坊の命が、母親のところへ戻ってきた瞬間でした。

開業から四十年以上、金ケ瀬で地域医療につくした京子は、人々にとって、家族のように温かく頼れる存在でした。京子も『金ケ瀬の方々は家族と同じ』と言って親しく接しました。そして、校医としての報酬や年に何十回も依頼される講演等の謝礼などをすべて、学校への検診器具や遊具等の寄贈にあてたのです。特に、『心の栄養に』と言って、毎年小中学校に贈った沢山の本は、『松山文庫』と名づけられ、多くの子どもたちに親しまれました。



京子の健康講話は、
わかりやすいと大評判だった

その志は金ケ瀬の人々に受け継がれ、現在も本の寄贈が続けられています。

昭和六十(一九八五)年、京子は長年の功績により、日本の女医に送られる最高賞である『吉岡弥生賞』を受賞しました。八十歳になっても、自転車を経やかにこいで往診する京子の姿がテレビで紹介されると、大きな反響を呼びました。

これを機に、京子への思いを形にしたいという願いが高まり、金ケ瀬の人々の手で『慈愛』という本が作られました。慈愛の意味は、『我が子を愛するよくな慈しみの気持ち』です。京子という人、その生き方にぴったりのタイトルです。この本には、三百六十人もの人々が原稿を寄せています。文章を書くのが苦手だという人も、病気で手が思うように動かない人も、みんなが進んで筆をとりました。京子への特別な思いがそうさせたのです。



人々の京子への思いがあふれる本「慈愛」の1ページより

すべての人のいのちを慈しみ、大切に守る。京子の医師としての信念は、九十八歳で亡くなるまで少しも揺るがず、たくさんの人々の身体を癒し、心を潤しました。

生前に金ケ瀬に松山家のお墓をつくっていた京子。その墓石には、京子自筆の句が刻まれています。
「早春の雲とび蔵王ま近にす」

(写真『慈愛』刊行委員会提供)

松山 京子

松山 京子は、明治三十九(一九〇六)年、三重県名賀郡花垣村(現在の伊賀市)に生まれた。東北大助教授であった松山氏との結婚を機に仙台へ。東北大学病院、大河原保健所勤務を経て、大河原町金ケ瀬に開業。長年小中学校の校医としても活躍し、町内外で行った衛生や健康の講話によって病氣予防にも尽力した。地域の人々から絶大な信頼を集めた『慈愛』の医師。

危篤：
病気が非常に重く
て、今にも死にそ
うなこと。

戸板：
雨戸の板、特に、
人や物をのせて運
ぶ場合などという。

吉岡弥生：
東京女子医学専門
学校・東京女子医
科大学創立者。
京子の恩師でもあ
る。